Osaka Shoin Women's University Repository

『源氏物語』における「ゆかし」の考察（四）

北村英子

本稿は、前稿「『源氏物語』における「ゆかし」の考察（三）」（「樟蔭国文学」第二十六号）に引続き、「梅枝」の巻から「ゆかし」の語義および好奇心・欲求を喚起する感覚等について、逐次用語例を検討していく。

「梅枝」の巻では、「ゆかし」という語は二例見当たる。それ等の用語例を示す。

○宰相中将、御使尋ねとどめさせたまひて、いたう酔はしたまふ。紅梅襲の唐の細長添へたる女の装束かづけたまふ。御返りもその色の紙にて、御前の花を折らせてつけさせたまふ。宮、「内のこと思ひやらるる御文かな。何ごとの隠ろへあるにか。深く隠したまふ」と恨みて、いとゆかしと思したり。

これは一番目の用語例で、「ゆかし」と形容詞の終止形で表われる。

語義は「読みたい」と意味付けるのが最も相応しい。それは螢兵部卿の宮が、源氏と朝顔の姫を恋愛関係にあるのではないかと思い、源氏から朝顔の姫君への消息文の内容に大変好奇心を募らせ、視覚意識を昂揚させる。そして、読みたいと思うのである。

次の用語例を示す。

○この御箱には、立ち下れるをばまぜたまはず、わざと人のほど、品分かせたまひつつ、草子巻物みな書かせたてまつりたまふ。よろづにめづらかなる御宝物ども、他の朝廷まで、あり難げなる中に、この本どもなん、ゆかしと心動きたまふ若人世に多かりける。

二番目も、形容詞の終止形で表われる。

語義は「拝見したい」と意味付けするのが適当である。それは明石姫君が入内するに当たり、草子箱に納められた、選びに選びぬかれた立派な幾冊かの本とは、一体どんなに珍重なものかと、世の多くの若人達（特に女房や、各家庭の子女を多く指

Osaka Shoin Women's University Repository

していると考えたい）が好奇心を寄せている。そして、拝見したいという視覚意識を働かせている。その心裡には、触ってみたい、出来たら自分も入手したいという欲望心が感取出来る。

さて、「梅が枝」の巻では二例共、形容詞の終止形「ゆかし」で表われ、それぞれ「思し」・「心動き」という、視覚的欲求に向って心が動く語を伴ない、意識を昂揚させている。そして、それ等はどちらも文字に関する事に対しての好奇心である。

次に「若菜上」の巻では、その用語例は六例を数える。それ等を検討していく。

○朱雀院「……。内裏の御ことは、かの御遺言違へず仕うまつりおきてしかば、かく末の世の明らけき君として、来し方の御面をも起こしたまふ、本意のごと、いとうれしくなん。この秋の行幸の後、いにしへのこととり添へて、ゆかしくおぼつかなくなんおぼえたまふ。対面に聞こゆべきことどもはべり。必ずみづからとぶらひものしたまふべきよし、もよほし申したまへ」など、うちしほたれつつのたまはす。

一番目は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。

語義は「お会いしたい」と意味付ける。これは、源氏の使者として病気見舞にやって来た夕霧を、院は御簾の中にお召し入れになって、親しくお話しになる。その院の言葉の中にみられ、昔の事が懐かしく思い出されて、院が源氏に会いたいと思う視覚的欲求が涌き起こる。そして、直接対面して数々の事を申し上げたい、だからご自身で尋ねてきてほしいと、次々に院が源氏を懐かしむ気持ち、早く会って語りたいという欲求が徐々に昂揚している心情が感取出来る。

次の用語例をみてみる。

○乳母「中納言は、もとよりいとまめ人にて、年ごろもかのわたりに心をかけて、外ざまに思ひ移ろふべくもはべらざりけるに、その思ひかなひては、いとどゆるぐ方はべらじ。かの院こそ、なかなか、なほいかなるにつけても、人をゆかしく思したる心は絶えずものせさせたまふなれ。その中にも、やむごとなき御願ひ深くて、前斎院などをも、今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ」と申す。

二番目も、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。語義は「見たい・会いたい」と直訳出来るが、文脈上「お求めになりたい」と意味付けるのがより適当のように思われる。それは、乳母が夕霧の「まめ男」に対して、源氏は逆に「好色男」であると語っている言葉の中に「ゆかしく思したる心」と表われ、源氏の方がかえってどんな場合につけても新しい女性を見たい、会いたいとお思いの気持ちは、絶えずお持ちであるという事。即ち、その心裡には、新しい女性をお求めになりたい・得たいという気持ちを常に持ち続けていらっしゃる事を示している。源氏のいつも変らぬ奔放な漁色心が窺い知れる。

次の用語例の検討に移る。

○朱雀院「皇女たちを、あまたうち棄てはべるなん心苦しき。中にも、また思ひゆづる人なきをば、とり分きてうしろめ

Osaka Shoin Women's University Repository

たく見わづらひはべる」とて、まほにはあらぬ御気色を、心苦しく見たてまつりたまふ。御心の中にも、さすがにゆかしき御ありさまなれば、思し過ぐしがたくて、

三番目は、「ゆかしき」と形容詞の連体形で表われる。

語義は「見たい・会いたい」と直訳出来ようが、文意に即して考えを加えるなら「心惹かれる」と意味付けるのがより適当であると思われる。これは、源氏の心中で、さすがに見たい会いたいと思う女三宮の御有様であるから、そのままお聞き過ごしになれないという意味であるが、換言すれば、源氏のお心の中では、心惹かれる女三宮の御有様であるから。と解し、源氏が女三宮に関心を寄せている心情が窺える。

次の用語例に移る。

○いとほしげなりし世の騒ぎなども思し出でらるれば、よろづにつつみ過ぐしたまひけるを、かうのどやかになりたまひて、世の中を思ひしづまりたまふらむころほひの御ありさまいよいよゆかしく心もとなければ、あるまじきことは思しながら、おほかたの御とぶらひにことつけて、あはれなるさまに常に聞こえたまふ。

四番目は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。

語義は「知りたく」と意味付ける。これは、源氏の心中で、魅力的な朧月夜を思い出し関心を寄せ、このごろのご様子が、知りたくて気にかかる。そして、思をこめて、常に手紙を送る。その心裡には、もう一度会いたい、そして話がしたいという朧月夜を恋しく思う意識が感取出来る。

次の用語例の検討に移る。

○「あやしく、ひがひがしく、すずろに高き心ざしありと人も咎め、また我ながらも、さるまじきふるまひを仮にてもするかな、と思ひしことは、この君の生まれたまひし時に、契り深く思ひ知りにしかど、目の前に見えぬあなたのことは、おぼつかなくこそ思ひわたりつれ、さらば、かかる頼みありて、あながちには望みしなりけり。横さまにいみじき目を見、漂ひしも、この人ひとりのためにこそありけれ。いかなる願をか心に起こしけむ」とゆかしければ、心の中に拝みてとりたまひつ。

五番目は、「ゆかしけれ」と形容詞の已然形で表われる。

語義は「知りたい」と意味付ける。これは源氏の独り言で、自分が無実の罪でつらい目にあい須磨・明石を漂泊したのも、明石の女御一人がお生れになるためであった。入道はいったいどんな願を心に立てたのであろうかと、源氏は知りたいと思った。それは願文を読む事によって知りたいと、視覚的欲求が働いているのである。

次は「若菜上」における最後の用語例である。

○穏しきものに、今はと目馴るるに心ゆるびて、なほかくさまざまに集ひたまへるありさまどものとりどりにをかしきを、心ひとつに思ひ離れがたきを、ましてこの宮は、人の御ほどを思ふにも、限りなく心ことなる御ほどに、とりわ

Osaka Shoin Women's University Repository

きたる御けしきにしもあらず、人目の飾ばかりにこそ、と見たてまつり知る。わざとおほけなき心にしもあらねど、見たてまつるをりありなむや、とゆかしく思ひきこえたまひけり。

六番目は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。

語義は「見たてまつるをりありなむや」の文から勘案すると、「見たく・拝見したく」と直訳出来るが、文意に即して考えを加えてみると、「ゆかし」の語義も徐々に広義に用いられるようになり、諸注釈書に解されているような「関心を寄せる・心ひかれる」という第二義的な意味に訳すと、より文脈上適切であると思われる。即ち、夕霧は女三宮を見たく（思う）。拝見したく（思う）と直訳出来る。又、女三宮を拝見する機会があるであろうかと、夕霧は女三宮に関心をお寄せになるのであった。と解されよう。これは、夕霧の心中には女三宮に心を惹かれる感情移入が先に働き、それに感覚器官の刺激が加わって、拝見したいという視覚的欲求が涌き起っていると思われる。従って、拝見したいという視覚的欲求が働いた時点においては、感情と視覚が複合的に働いて意識が強く涌き起っていると考えられる。

以上「若菜上」巻を検討してみると、六例中の四例が連用形で、一例が連体形で、一例が已然形であり、連用形がその多数を占めている。そして、六例中の「ゆかし」という感覚語彙の周辺には、「思う」「心」等の心内語が多用され、意識を増強している。それ等の「ゆかし」の欲求は、「見たい」「会いたい」「読みたい」というように視覚に関する欲求が殆どであるのは興味を示すところである。これは、人間の感覚を考えてみると、どこの感覚より視覚が発達している表われであるといえようか。又、それ等の感覚を感受する人は、この巻においては全て男性ばかりであるというのは、いささか注意を引くところである。それから語義について考察する場合に、感覚面から解される場合と、先にすでに示したように、文意から勘案して心情面からより広義に解される場合と、二様の解釈が認められる個所があった。

次の巻の「若菜下」では、「ゆかし」という語は九例の多くを認める。それ等の用語例を順次検討していく。

○柏木「唐猫の、ここのに違へるさましてなんはべりし。同じやうなるものなれど、心をかしく人馴れたるはあやしくなつかしきものになむはべる」など、ゆかしく思さるばかり聞こえなしたまふ。

一番目は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。

語義は「見たい」と感覚面から考察して意味付けられるが、文意に即して心情面から勘案すると、「欲しく・得たく」とか、「興味を持つ・関心を持つ」というように広義に捉える事も出来る。これは、柏木が猫好きの東宮に向って興味をそそるように語るという描写中に使用されている。即ち、柏木は女三宮愛玩の猫を入手すべく、まづは東宮のもとにと所望している。こう

Osaka Shoin Women's University Repository

いう内容を有するが、「ゆかしく」を感覚面から現代語訳すると、東宮が見たくお思いになられるように敢えて申し上げなさるとなり、心情面から訳すると、東宮が欲しくお思いになられるように猫の事を敢えて申し上げなさるとなり、又、東宮が関心をお持ちになられるように猫の事を敢えて申し上げなさる。と解されよう。この用語例において、「ゆかし」の対象として珍しく、動物である猫が登場するのは興味を示すところである。可愛く人なつこい猫に好奇心を示す様子が窺える。

次の用語例の検討に移る。

○母君の、あやしくなほひがめる人にて、世の常のありさまにもあらずもて消ちたまへるを口惜しきものに思して、継母の御たりをば、心つけてゆかしく思ひて、いまめきたる御心ざまにぞものしたまひける。

二番目も、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。

語義は文脈上、感覚的意義からより広義に、心情面から捉えた意義で解する方が適訳になると考えられる。従って、「慕わしく」と意味付けする。そして、真木柱の姫は継母玉鬘に心を寄せ慕わしく思うという事になろう。真木柱の姫が玉鬘を敬慕する心情が窺える。

次の用語例を示す。

○源氏「年ごろさりぬべきついでごとには、教へきこゆることもあるを、そのけはひはげにまさりたまひにたれど、まだ聞こしめしどころあるもの深き手には及ばぬを、何心もなくて参りたまへらむついでに、聞こしめさむとゆるしなくゆかしがらせたまはむは、いとはしたなかるべきことにも」と、いとほしく思して、このごろぞ御心とどめて教へきこえたまふ。

三番目は、「ゆかしがら」と動詞の未然形で表われる。

語義は感覚面から考察すると、「聞こしめさむ」とあるところから、「聞きたがる」と意味付けられる。又、心情面から捉えると、「所望する」と意味付けられる。従って、この用語例中における「ゆかしがる」は二様の意味を包含している。文意に即して現代語訳してみると、一方では、「院がお聞きになろうとして、強く聞きたがりなさったならば、きまり悪い目にもおあいになろう」と、気の毒にお思いになって、このごろは熱心にお教え申し上げなさる。と解する事が出来る。又一方では、「院がお聞きになろうとして、強く所望あそばされるのでは、きまり悪い目にもおあいになろう」。と気の毒にお思いになって、このごろは熱心にお教え申し上げなさる。と解する事が出来る。これは、源氏の思いで、院が女三宮が弾奏する技量がどんなに上達したか知りたがりなさったら、きまりの悪い思いをするだろうと、源氏は気にして熱心に教えるという描写の個所である。結局、院の欲求を示している。

次は、前三番目の用語例から話が連繋しているものである。それを示す。

○女御の君にも、対の上にも、琴は習はしたてまつりたまは

Osaka Shoin Women's University Repository

ざりければ、このをり、をさをさ耳馴れぬ手ども弾きたまふらんをゆかしと思して、女御も、わざとあり難き御暇を、ただしばし、と聞こえたまひてまかでたまへり。

四番目は、「ゆかし」と形容詞の終止形で表われる。

語義はこの場合、感覚面から捉えるのが妥当で「聞きたい」と意味付ける。これは、明石の女御も紫の上も、琴は習わせておあげにならなかったのだから、女三宮に琴を教授なさるこのような折に、めったに聞いた事もない珍しい曲の数々を、お弾きになるであろうから、それを聞きたいとお思いなされて、と現代語訳出来る。即ち、源氏が女三宮に特別教授する琴の音を明石の女御が（紫上もか？）聞きたい。と聴覚的欲求を働かせている。その心裡には美しい音色に心惹かれる美意識が窺える。又音楽好きの人柄が感取出来る。

次の用語例も、四番目の用語例から音楽の叙述が連繋しているものである。それを示して検討する。

○院の御賀、まづおほやけよりせさせたまふ事どもこちたきに、さしあひては便なく思されて、すこしほど過ごしたまふ。二月十余日と定めたまひて、楽人舞人など参りつつ、御遊び絶えず。源氏「この対に常にゆかしくする御琴の音、いかでかの人々の箏琵琶の音も合はせて、女楽試みさせむ。ただ今の物の上手どもこそ、さらにこのわたりの人々の御心しらひどもにまさらね。……」

五番目は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。

語義は感覚面から捉えるのが妥当で「聞きたい」と意味付ける。そして、「この対にいて常に聞きたいと言っている、あなたの御琴の音に、ぜひあの方方の箏や琵琶の音を合奏させて、女楽を試みさせてみたい。……」。と現代語訳出来る。これは、源氏が女三宮に向って、音楽について語っているのである。即ち、紫の上が女三宮の弾奏する琴の音色に、好奇心を示し、聞きたいと聴覚的美意識を感興している様子が窺える。

次の用語例の検討に移る。

○かかる御あたりに、明石は気おさるべきを、いとさしもあらず。もてなしなど気色ばみ恥づかしく、心の底ゆかしきさまして、そこはかとなくあてになまめかしく見ゆ。柳の織物の細長、萌黄にやあらむ、小袿着て、羅の裳のはかなげなるひきかけて、ことさら卑下したれど、けはひ、思ひなしも心にくく侮らはしからず。

六番目は、「ゆかしき」と形容詞の連体形で表われる。

語義は「知りたい」と直訳出来る。そして、こういう方々のおそばに並ぶと、明石は当然圧倒されるはずであるが、別にそうでもない。身のこなしなど意味ありげで、こちらが恥ずかしくなるくらいで、その心の底が知りたい様子をしており、どことなく上品で優雅に見える。と現代語訳出来る。これは、源氏が四人の女性を花にそれぞれたとえる描写の一場面で、源氏は明石の御方の個性美を評しているのであるが、明石の御方を拝見して受ける感触から、心の底の深みを知り、心惹かれる美的心

Osaka Shoin Women's University Repository

象を感じ取り、知りたいという欲求が昂揚する。源氏の美意識が働いているのである。

次は六番目の用語例の連繋節である。それを示す。

○これもかれも、うちとけぬ御けはひどもを聞き見たまふに、大将も、いと内ゆかしくおぼえたまふ。対の上の、見しをりよりも、ねびまさりたまへらむありさまゆかしきに、静心もなし。宮をば、いますこしの宿世及ばましかば、わがものにても見たてまつりてまし、心のいとぬるきぞ悔しきや。

この用語中には「ゆかし」の語が二語認められる。論述していくに当たり、便宜上、前者を七番目とし、後者を八番目と付して、論を進めていく。

さて、七番目は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。

語義は感覚面から捉え、「見たく」と意味付ける。そして、こちらの方もあちらの方も、とりすましていらっしゃる御様子等を聞いたり見たりなさると、大将も、大変御簾の中を見たくお思いになる。と現代語訳する事が出来る。この描写は、御簾で中が見えないが、美しい女性達のいる気配を感取し、夕霧の心は御簾の中の女性群に強く気持ちが惹かれ、とにかく見たいという視覚的欲求が昂揚する。夕霧の美しい女性に憧れる美意識が窺える。

この描写に続いていくのが、八番目で「ゆかしき」と形容詞の連体形で表われる。

語義はやはり感覚面から捉え、「見たく」と意味付ける。そして、夕霧が紫の上を、かって見た時よりも、年と共に美しさを増しているであろう様子が見たくて、心が落ち着かない。と現代語訳出来る。これは、特に紫の上の関心が強く、夕霧は以前（野分巻）に一度紫の上を垣間見した事があり、その美貌が印象的に心に映り、あの当時より増して美しく成長した女盛りの姿を思い浮かべ、見たい・会いたいという視覚的欲求が昂揚する。夕霧の心裡には、源氏の正妻格である紫の上を憧憬する念と、恋愛感情の念とが複雑に入りまじり、関心を注いでいるものと思われる。この描写中においても、夕霧の美しい女性に対する美意識が感取出来る。

次は「若菜下」巻における最後の用語例である。それを示し検討する。

○とみにもえ渡りたまはねば、また、母北の方うしろめたく思して、母北の方「などか、まづ見えむとは思ひたまふまじき。我は、心地もすこし例ならず心細き時は、あまたの中にまづとり分きて、ゆかしくも頼もしくもこそおぼえたまへ。かく、いとおぼつかなきこと」と恨みきこえたまふも、また、いとことわりなり。

九番目は、「ゆかしく」と形容詞の連用形で表われる。

語義は感覚面から捉え、「会いたく（も）」と意味付ける。そして、「どうして、すぐ顔を見せようとお思いにならないのですか。私は、気分が少しでも普通でなく心細い時は、たくさんの子供の中でも、まずだれよりもあなたに会いたくもあり、

Osaka Shoin Women's University Repository

頼りにも思われなさる。こんなに顔を見せないのは気になる事ですよ」。と現代語訳出来る。これは、柏木の実母、北の方の言葉である。病気の柏木に対して、実家で養生するよう促しているのである。たくさんの子供の中でも、長男に期待をかけ、愛している母としての情愛と、病気を心配する母の心痛とが窺える。即ち、母が気分がすぐれない時は、まず柏木に会いたい欲求が涌き起こっていたのに……。　と愚痴をこぼす。従って、この用話例中の「ゆかし」は、母親の気持ちが弱くなった場合に起こる、子供に会いたくなる意識を示している。

以上、「若菜下」巻における九の用語例を検討吟味してきたが、これ等を通観してみると、形容詞の連用形においては、すべてに、「思す」「思ふ」「おぼえ」という心の動きを表わす語を「ゆかし」の語に下接させ、「ゆかし」の意識を高めている。但し、用語例五においては、形容詞の連用形に扱ったが、「ゆかしくする」と、「ゆかしく」に動詞「する」がプラスされ、動詞的用法となるため、先にみてきたような語は接続を見ない。形容詞の終止形においても、やはり「思す」という語が下接されている。形容詞の連体形においては、「心の底ゆかしき」・「ゆかしきに、静心」と、心の状態を表わす語が伴っている。

次に対象においては、珍しく動物猫がみられ（用語例一）・親子の関係を示すもの（姫→継母、用語例二）、（実母→長男、用語例九）・楽音に関するもの（用語例三・四・五の一連をなす描写に）・男女に関するもの（用語例六・七・八の一連をなす描写に）と種々にわたっている。

次に意識についてみてみると、視覚に関するもので、男性の意識は用語例一・七・八、女性の意識は用語例九のみで、やはり男性の意識が多い。聴覚に関するものは、用語例三・四・五の一連の描写で、男性の意識が一例・女性の意識が二例みられる。敬慕に関するもの用語例二のみで、女性の意識である。感触で捉えるものは用語例六のみで、男性の意識である。このようにまとめてみると、感覚以外の意識もみられ、種々にわたる意識が描写されている。

本稿においては、「梅枝」の巻から「若菜下」の巻までを検討してきた。

尚、「ものゆかしがり」については別稿に譲りたい。

（続）